



九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

この多様な世界への誘い

2026

九州大学文学部

SCHOOL OF LETTERS, KYUSHU UNIVERSITY

自分と向き合う



文学部長
青木 博史

人文学は、人間が生み出す文化・社会における多様な課題の解決に向け、自ら問い、考究する学問です。文学部および人文科学府では、そのために必要な知識と方法論を学びます。

研究を行うにあたって、我々は少なくとも三度、自分と向き合います。まず、問いを立てる時。その問いは、果たして学術的意義を有した問いと成りうるのか。先人が何をどこまで明らかにしているのか把握し、自分の立ち位置を確認します。次に、論証を進める時。自らの主張に対して、経験的証拠を適切に提示できているか。客観性を有した論理の展開が求められます。そして、成果を発表する時。我々はその研究成果について、言語を用いて示します。言語化するにあたって、自分は書き手（話し手）であると同時に、最初の読み手（聞き手）でもあります。この時、どれだけ厳しい目で自分を見つめられるか。

自ら問い、考え、言語化する。他者との関わりの中で自らを相対化し、真摯に自分と向き合しましょう。



SCHOOL OF LETTERS, KYUSHU UNIVERSITY CONTENTS

自分と向き合う	文学部の授業を覗いてみませんか？	9
学校推薦型選抜・「国際コース」の概要	哲学コース	10
九州大学文学部の特色	歴史学コース	14
文学部の構成	文学コース	17
文学部のカリキュラム	人間科学コース	21
取得できる資格・国際交流	先輩からのメッセージ	24
卒業後の進路		

文学部は、令和8年度入試から学校推薦型選抜を実施しています

- ・学校推薦型選抜においては、文学部での学びへの興味や適応力・理解力、更には大学院進学を見据えて文学部で学ぶ意思を見るために、学校長からの推薦書、調査書および志望理由書（研究計画書）による書類審査と面接を課します。
- ・募集人員は10名です。
- ・学校長が推薦できるのは1校につき1名です。

入学者選抜方法

学校推薦型選抜

(1) 第1次選抜

- ・提出された推薦書、調査書、志望理由書（研究計画書）の総合評価により選抜を行います。

(2) 第2次選抜

- ・第1次選抜の合格者に対し、個人面接及び大学入学共通テストの成績の総合評価により選抜を行います。

文学部は、「国際コース」を設置しています

次のような点が、従来の文学部とは異なります。

- ・国際コースの独自入試を実施します（下記参照）。
- ・1年次に英語インテンシブ・コースの履修を課すなど、国際コースだけの履修要件があります。
- ・2年次からは、従来の文学部と同じく、哲学・歴史学・文学・人間科学の4つのコースの中の21の専門分野から、1つの専門分野を選んで履修します。
- ・国際コースの「コース」の概念は、従来の文学部の4つの「コース」とは違います。
国際コースの学生は、1年次から独自の課程が存在し、2年次から、従来の4つの「コース」に分かれます。
- ・外国語でなされる授業や、外国語の文献等を対象とする授業の選択が推奨されます。
- ・留学すること自体が卒業単位として認められています。
- ・募集人員は10名です。

入学者選抜方法

総合型選抜

(1) 第1次選抜

- ・提出された調査書、志望理由書の総合評価により選抜を行います。

(2) 第2次選抜

- ・第1次選抜の合格者に対し、英語小論文、英語による個人面接（第1次選抜合格者数により、集団面接を行う場合があります）及び大学入学共通テストの成績の総合評価により選抜を行います。

九州大学文学部の特色

沿革

国立大学法人九州大学の歴史は明治36（1903）年にさかのぼります。この春、東京帝国大学、京都帝国大学に続く第三の帝国大学を九州の地に設置するために、京都帝国大学の一学科として京都帝国大学福岡医科大学が設置されたのです。やがて、明治44（1911）年1月1日に九州帝国大学が正式に設立され、文学部は、大正13（1924）年9月に、法文学部の一学科としてスタートしました。

昭和22（1947）年10月、帝国大学令が改正されて、帝国大学は国立大学となり、本学の名称も九州大学と改められました。次いで、昭和24（1949）年4月に法文学部が分離し、文学部が独立しました。また、同年5月には学制改革が行われ、旧制の九州帝国大学は新制九州大学に包括されました。さらに、昭和28（1953）年4月には新制度による大学院が発足し、文学研究科が開設されました。

文学部は設立当初17講座で発足しましたが、その後講座が増設されて、平成12（2000）年には、大学院重点化と研究院制度の発足に伴い、人文学科1学科4コース21専門分野という構成になりました。現在では、21の研究室と50万冊におよぶ蔵書を備え、人文学の拠点としてさらなる発展の機運に満ちています。さらに、平成16（2004）年度からは国立大学法人九州大学に移行し、独立大学法人としての新たなスタートを切りました。

文学部の目的は、文学部を構成する各専門分野を専攻し、それらの分野の知識や研究技術を習得し、それを通じて人間形成をはかることにあります。本学部の卒業生は、昭和3（1928）年以来令和7（2025）年3月までに、旧制1,069名、新制9,994名、計11,063名に達しています。卒業生は、学界、教育界、官界、さらには広く実業界にも迎えられており、現代社会の変化に対応できる新たな人材の育成にも努めています。

文学部の学生受け入れ方針（アドミッションポリシー）

1. 文学部の教育理念

文学部の諸学問の根本は、私たちが用いる言葉を通じて、人間の本質とその営為を探究することにあります。ここで言葉は、単なる情報伝達的手段ではなく、人間の精神文化を培い、表現し、蓄積する知の宝庫を意味しています。言葉に自覚的かつ批判的に関わる中で、人間存在の奥深さへと眼差しを向け、文化・歴史・社会の多様性を認識し、新たな人文学的知の創造に寄与していくことが、文学部の教育理念です。

2. 文学部の教育プログラム

教育の目的

文学部は、各専門領域の研究者である教員と学生とが教育と研究を通して研鑽を行い、人文学的な知識・思考方法を習得する活気に満ちた学部です。教育の目的は、人文学的教養と知性を身につけ、研究や仕事の場で活躍する優れた人材を養成し、社会に送り出すことにあります。

教育課程の特色

文学部は全体を一学科（人文学科）とし、哲学・歴史学・文学・人間科学の4コースの下に21の専門分野が置かれています。学生は一年間教養教育を受けた後、二年次からいずれかのコース・専門分野に所属し専門分野の講義・演習を受講するとともに文学部の全分野の多様な授業を履修することができます。そして最終的に、自らの関心に従って所属の専門分野からテーマを選び、四年間の勉学の集大成として自力で卒業論文をまとめなければなりません。

また、国際コースでは、一年次に独自の英語を重視した教養教育を受け、二年次からは国際コース以外の学生と同様にいずれかのコース・専門分野に所属するとともに、国際性を重視した独自の授業を履修します。

人文学科の各コースの内容

■ 哲学コース

哲学コースは、哲学・哲学史、倫理学、インド哲学史、中国哲学史、美学・美術史の5専門分野から構成されています。東西の文化的伝統の中で人類が生み出してきた様々な精神的所産——哲学・思想・宗教・芸術にかかわる文献や作品——を、厳密かつ真摯に読解し、また思索することを通して真理の探求を行います。人類は東西の様々な文明圏において、多様な宇宙観・世界観・人間観・生命観・倫理観を創り出し、各時代を通じてそれを展開させてきました。また、生と死・老いと病いを見つめることで、各種の宗教を生み出し、信仰の諸形態を作り出してきました。さらに崇高なるものを希求して豊かな美の世界を展開してきま

した。哲学コースを構成する各専門分野では、人類が生み出してきたこれらのものを、現代が抱える諸問題——環境問題・生命倫理・民族問題など——をも視野に入れて、主として文献と資・史料に基づいて研究しています。

■ 歴史学コース

歴史学コースは、日本史学、東洋史学、朝鮮史学、考古学、西洋史学、イスラム文明学の6専門分野から構成されています。歴史学は、過去の探求と現代の認識との——さらには未来への見通しとの——間の相互対話の中でなされる精神的営みです。つまり、現代社会の成り立ちへの関心、現代とそれ以前の「異文化」社会との異質性・同質性への関心を重視する学問です。本コースは、特定の地域と時代における社会（経済・政治・文化の総体）の特質と相互間の共通性を、批判精神をもって実証的に、また理論的に解明することに主眼をおいています。具体的には、先学の著作を批判的に読む中で自らの問題点を鍛え直してシャープなものとし、次いで、自ら直接に史・資料を解読し史跡を調査することにより、自らの視角から、ある特定の地域と時代の社会像を復原することが求められます。この過程で、人間精神の多様性を認識するセンス、論理的思考力と独創性が養われることが期待されるのです。

■ 文学コース

文学コースは、国語学・国文学、中国文学、英語学・英文学、独文学、仏文学の5専門分野から構成されています。日本・中国・英米・独・仏の言語や文学を研究するコースで、それぞれ古典から現代までの、具体的かつ多様な文学作品（詩・小説・戯曲・思想的著作・批評など）を精査解読し、作品の背景をなす文化や、さらには文学そのもの（ないしは、いわゆる「文学性」）について省察を行います。本コースでは、日本語・中国語・英語・独語・仏語など言葉そのものを研究対象とし、語彙や文法の歴史の変遷や、現代におけるその運用の実態についての調査・考察を行うこともできます。また、外国文学系の専門分野にはいずれもそれぞれの言語を母語とする教員が配置され、生きた外国語による授業が行われています。

■ 人間科学コース

人間科学コースは、言語学・応用言語学、地理学、心理学、比較宗教学、社会学・地域福祉社会学の5専門分野から構成されています。人間を科学的に研究するコースで、地域を含む社会と人間との関係の中から問題を発見し、仮説を立て、それを実験・調査・フィールドワーク、統計解析により実証するという実践的調査研究を行っています。人間の行動や心理、さらに個人と社会の相互作用にも関心を寄せ、いわば人間・社会研究の視点から教育・研究を進めており、現代社会のさまざまな現象を包括的に把握して、産業化、情報化、高齢化、国際化などをめぐる生じる問題の解決にも取り組んでいます。言語学、地理学、心理学、宗教学、社会学といった学問領域からなる本コースには独自の学問研究の成果が期待されています。

3. 文学部の求める学生像

文学部では、自ら問題を見出し、筋道を立てて思考し、精確に表現できる学生の育成を目指しています。そのためには、自ら調査、読書し、他の人々と対話しつつ自らの考えを発展させていく姿勢が大切です。それゆえ、文学部で学ぼうとする者は、何よりも次の三つの資質を備えていることが望まれます。

1. 言葉への強い興味。とりわけ、文学作品や古典に対する感受性
2. 人間への飽くなく好奇心と、「私とは何か?」という真摯な問いかけ
3. 文化・歴史・社会といった、世界の多様性への開かれた関心

さらに、国際コースの学生には、特に次のような資質を備えていることが望まれます

1. 日本語と、複数の外国語への強い興味、ならびに文学や思想に対する感受性
2. 世界の多様な文化・歴史・社会への開かれた関心
3. 将来国際人として活躍することへの意欲

4. 入学者選抜の基本方針

文学部は高等学校の教育課程を尊重し、受験生の基本的知識、論理的思考力、表現能力を重視しています。大学入学共通テストにおいては、幅広い基本的知識の習得を見るため、国語、地理歴史・公民、数学、理科、外国語及び情報を課しています。一般選抜（前期日程）においては、より深い知識と論理的思考力を見るため、国語・数学・外国語・地理歴史を課し、主にマークシート方式である大学入学共通テストを補完する形で記述式の問題を中心に出题しています。また、主体性等を評価するために、調査書を利用しています。一般選抜（後期日程）においては、論理的思考力と表現能力を見るために、小論文を課しています。総合型選抜（国際コース）においては、日本語と、複数の外国語への強い興味、ならびに文学や思想に対する感受性、世界の多様な文化・歴史・社会への開かれた関心、将来国際人として活躍することへの意欲などの資質を見るために、志望理由書、英語小論文、英語による個人面接を課しています。

令和8年度入試から開始する学校推薦型選抜においては、文学部での学びへの興味や適応力・理解力、更には大学院進学を見据えて文学部で学ぶ意思を見るために、学校長からの推薦書、調査書および志望理由書（研究計画書）による書類審査と面接を課します。

文学部の構成

文学部は人文学科1学科から成り、人文学科は哲学・歴史学・文学・人間科学の4コースに分かれています。各コースはさらに、合計21の専門分野に分かれ、それぞれの専門分野では1～4名の教員によるきめ細かな教育が行われています。

哲学コース

哲学コースには、哲学・哲学史、倫理学、インド哲学史、中国哲学史、美学・美術史の5つの専門分野があり、以下のようない教員で構成されています。

専門分野	教員名	研究専門分野
哲学・哲学史	倉田 剛 教授	哲学基礎論
	大西 克智 教授	西洋哲学史
	葛谷 潤 准教授	西洋近現代哲学
倫理学	吉原 雅子 准教授	現代倫理思想
インド哲学史	片岡 啓 教授	古典インドの宗教・思想・文化
中国哲学史	南澤 良彦 教授	中国古代中世思想史
	藤井 倫明 准教授	中国近世近代思想史
美学・美術史	東口 豊 准教授	近現代美学、音楽美学
	伊藤 拓真 准教授	西洋美術史、美術批評史

*上記以外に大学院人文科学研究院広人文科学講座の外国人教員が文学部において日本文化に関する講義を英語で開講しています。

歴史学コース

歴史学コースには、日本史学、東洋史学、朝鮮史学、考古学、西洋史学、イスラム文明学の6つの専門分野があり、以下のような教員で構成されています。

専門分野	教員名	研究専門分野
日本史学	岩崎 義則 准教授	日本近世史
	荒木 和憲 准教授	日本中世史
	国分 航士 講師	日本近現代史
	内田 敦士 講師	日本古代史
東洋史学	中島 楽章 准教授	中国近世史・東アジア海域史
朝鮮史学	森平 雅彦 教授	朝鮮中世・近世史、東アジア交渉史
	小野 容照 准教授	朝鮮近代史
考古学	辻田淳一郎 教授	日本考古学
	鈴木 舞 准教授	東アジア考古学
西洋史学	足立 孝 教授	スペイン中世史
	今井 宏昌 准教授	ドイツ現代史
イスラム文明学	清水 和裕 教授	アラブ史、初期イスラム史
	小笠原弘幸 教授	オスマン帝国史

文学コース

文学コースには国語学・国文学、中国文学、英語学・英文学、独文学、仏文学の5つの専門分野があり、以下のような教員で構成されています。

専門分野	教員名	研究専門分野
国語学・国文学	青木 博史 教授 川平 敏文 教授 岡田 貴憲 准教授 古川 大悟 講師	日本語史 近世文学 中古文学 古代語文法
中国文学	静永 健 教授 孫 琳浄 講師	中国古典文学 中国古典小説
英語学・英文学	鵜飼 信光 教授 高野 泰志 教授 前田 雅子 准教授 トーマス・パッチェラー 准教授	イギリス文学 アメリカ文学 英語学 英語学
独文学	小黒 康正 教授 田口 武史 准教授 ヤニック・レオン・ヴァンケルマン 准教授	ドイツ近現代文学 ドイツ近代文学 ドイツ古典文学・近代文学
仏文学	高木 信宏 教授 宮崎 海子 准教授	フランス近代文学 フランス現代文学

人間科学コース

人間科学コースには、言語学・応用言語学、地理学、心理学、比較宗教学、社会学・地域福祉社会学の5つの専門分野があり、以下のような教員で構成されています。

専門分野	教員名	研究専門分野
言語学・応用言語学	上山あゆみ 教授 下地 理則 教授 太田 真理 准教授	生成文法および日本語統語論 琉球語、日本語諸方言、言語類型論 言語脳科学、心理言語学
地理学	遠城 明雄 教授 伊藤 千尋 准教授	人文地理学、都市研究 人文地理学、アフリカ地域研究
心理学	中村 知靖 教授 光藤 宏行 教授 山本健太郎 准教授	計量心理学、心理測定学、テスト理論 知覚心理学、視覚科学 実験心理学、時間知覚
比較宗教学	飯嶋 秀治 教授 高橋沙奈美 准教授	文化人類学、宗教民俗学 宗教社会学、ロシア地域研究
社会学・地域福祉社会学	高野 和良 教授 山下亜紀子 教授 井上 智史 講師	地域福祉社会学 家族社会学、福祉社会学、地域社会学 福祉社会学、ジェンダー・セクシュアリティ研究

文学部のカリキュラム

特色あるカリキュラム

九州大学の授業科目は、大きく基幹教育科目と専攻教育科目とに分けられ、両科目は有機的な連関のもとに4年一貫の教育として行われています。このうち、専攻教育科目は各学部ごとに行われるものであるのに対して、基幹教育科目は全学的に協力して一体となって実施されています。基幹教育科目は、学部専攻教育ならびに大学院での学習へとつながる勉学意欲をつくりだし、そこでの効果的な学習を可能にする幅広い範囲の基礎的な能力を培う役割を持っています。

文学部では、基幹教育科目48単位以上、専攻教育科目80単位以上、合計128単位以上を修得しなければなりません。専攻教育科目は、学部全体の共通科目である文学部コア科目（人文学科基礎科目、人文学科共通科目および古典語・外国語科目で構成されています）9単位以上、各コースの共通科目であるコース共通科目8単位以上、それぞれの専門分野科目26単位以上、これらの科目の中から自由選択科目27単位以上、さらに卒業論文10単位を修得しなければなりません。

1年次は基幹教育科目を中心とした履修になりますが、専攻教育科目として人文学科基礎科目を修得することができます。2年次からは、さまざまな専攻教育科目を履修することができ、最終年度の4年次には、卒業論文を作成し提出しなければなりません。さらに、これら専攻教育科目に加えて、中学校又は高等学校の教員免許状取得、学芸員の資格取得、社会調査士、認定心理士の資格取得のための授業科目や、公認心理師及び宗教文化士の受験資格取得のための科目も開講されています。以下に標準的な履修科目と時期を示します。

標準的な履修方法

	1年次	2年次	3年次	4年次
基幹教育科目 (48)	基幹教育セミナー (1) 課題発見科目 (1) 学術アプローチ科目 (1) 言語文化科目 (12) 文系ディシプリン科目 (10) 理系ディシプリン科目 (5) サイバーセキュリティ科目 (1) 健康・スポーツ科目 (1) 総合科目 (1) その他 (13)	高年次基幹教育科目 (2)		
専攻教育科目 (80)	人文学科基礎科目 (4)	人文学科共通科目 (2) 古典語・外国語科目 (3)	コース共通科目 (8) 専門分野科目 (26) 自由選択科目 (27)	卒業論文 (10)
その他		教職科目 学芸員科目 社会調査士取得のための科目 認定心理士取得のための科目 公認心理師受験資格取得のための科目 (※※) 宗教文化士受験資格取得のための科目		
備考	入学	専門分野決定		卒業

※括弧内の数字は最低必修単位数を示す。

※※公認心理師受験資格取得には、文学部に加えて大学院修士課程での所定の科目の履修が必要となります。

取得できる資格・国際交流

取得できる資格

文学部人文学科では、卒業までに「それぞれの資格毎に定められた基礎資格と所要単位」を修得すれば、以下のような免許状や資格を取得することができます。（公認心理師及び宗教文化士は受験資格の取得です。）

【文学部で取得可能な資格一覧】

	概 要
中学校教諭 一種免許状	中学校における「社会」、「国語」、「英語」の教員免許
高等学校教諭 一種免許状	高等学校における「公民」、「地理歴史」、「国語」、「英語」、「独語」、「仏語」及び「中国語」の教員免許
※免許の種類毎に必要な単位を修得し、教育委員会に申請すれば、卒業時に教員免許状を取得することができます。その後、大学院人文科学府修士課程に進学して所定の単位を修得すれば、「専修免許状」を取得することができます。（卒業・修了後、実際に学校の教員になるためには、「教員採用試験」に合格する必要があります。）	
学芸員	学芸員とは、博物館法に基づく専門職員で、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究、その他これに関連する事業の専門的事項を担当する職員です。
社会調査士	現代の社会では、新聞社等の世論調査や社会調査の結果が情報として私達に伝えられています。「社会調査士」とは、このような社会調査を行う専門職として、一般社団法人社会調査協会が認定するものです。
認定心理士	「心理学の専門家として仕事をするために必要な心理学のミニマムエッセンス（最小限の標準的基礎学力と技能）を修得している」と社団法人日本心理学会が認定するものです。
公認心理師	心の健康問題に対して、保健医療・福祉・教育など他職種の関係者と連携しながら心理に関する支援を行う国家資格です。大学において指定の科目を修め、かつ、大学院においても指定の科目を修めその課程を修了した際に受験資格が得られます。
宗教文化士	現代社会において国際的に親交を深めるためには他の宗教、異文化の理解が必須です。宗教文化士は宗教文化推進センターが認定するものです。

国際交流

日本の国際化の進展とともに、文学部・大学院における国際交流も年々活発化し、教員や院生・学生の交流が盛んに行われています。現在、文学部および大学院人文科学府には17カ国、89名の外国人留学生が在籍しています。このうち中国・韓国・台湾からの留学生が7割弱を占め、他は欧米・南米の諸国などとなっています。一方、毎年若干名の日本人学生が文学部および大学院人文科学府から外国に留学しています。さらにまた、教員の外国出張や海外研修も頻繁に行われていることに加え、英語学・英文学、独文学、仏文学、中国文学の各研究室には外国人教師が配置されていて、ネイティブ・スピーカーによる教育・研究が行われています。

文学部と学部間の学術・学生交流協定を結んでいる外国の大学は、現在、ケンブリッジ大学東洋学部（イギリス）、東義大学校人文大学（韓国）、ルール大学ボーフム歴史学部・東アジア研究学部（ドイツ）、ヘント大学芸術・哲学部（ベルギー）、ペルージャ外国人大学（イタリア）、昌原大学校人文大学（韓国）、暨南大学文学院（中国）及び国立台湾大学の8校があります。また、大学間交流協定を結んでいる大学には、ボルドー大学（フランス）、中山大学（中国）、北京大学（中国）、ソウル大学校（韓国）、国立釜山大学校（韓国）、アリゾナ州立大学（アメリカ合衆国）、バーミンガム大学（イギリス）、ミュンヘン工科大学（ドイツ）などがあり（学術交流協定：36カ国・地域、158機関、学生交流協定：34ヶ国・地域、149機関（2026年4月現在））、国際交流の大きな礎となっています。

さらに、考古学研究室と釜山大学、中国哲学史、中国文学研究室とソウル大学など、各研究室的交流も盛んであり、訪問研究員も絶えず受け入れています。これ以外の研究室においても、外国人研究者を招いて講演やシンポジウムが毎年開催されていて、活発な国際交流が行われています。

卒業後の進路

卒業後の進路

九州大学文学部には、毎年約160名の卒業生がいます。そのうちのおよそ80%が就職し、およそ12%が大学院に進学したり、大学院の進学をめざして研究生や聴講生として大学に残ります。卒業時に就職を希望している者の大多数は、企業や官公庁に就職したり、高校や中学の教員になります。過去5年間の就職者数を産業別に示すと下の表のようになります。

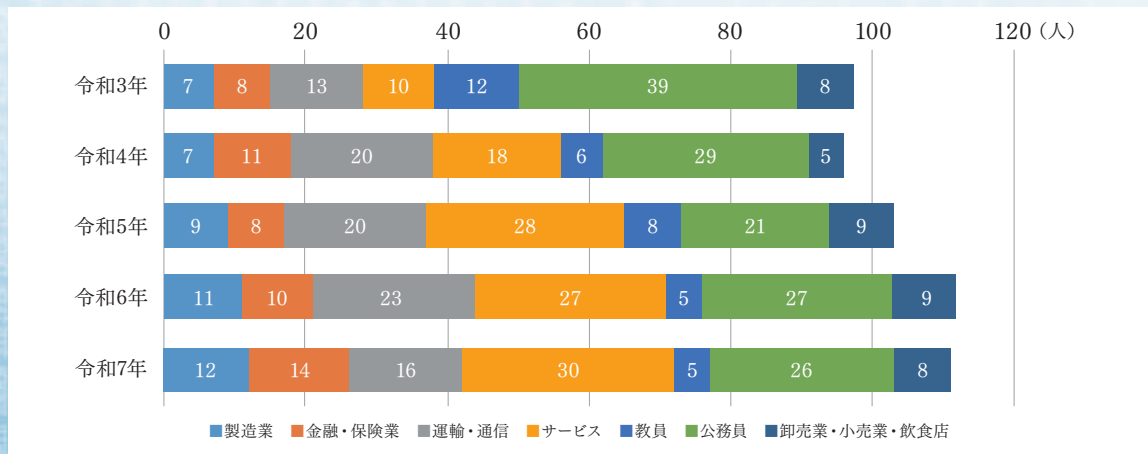
九州大学文学部は大学院人文科学府修士課程・博士課程をもち、学部教育よりも大学院教育を主とする、一般の大学とは異なって研究者養成を重視する学部です。そのため、3年生や4年生になると、「大学院に進んで研究をさらに続けるか、それとも就職するか」という悩みを、多くの学生が抱きます。令和7（2025）年4月には既存の大学院に加え、新たに「人文情報連係学府（修士課程）」をも開設しました。また、就職を考えるためには、3年生になったときにはすでに、かなり明確な目的意識をもっていることが必要でしょう。大学院に進学するにせよ、企業や官公庁などに就職するにせよ、重要なのは、「自分のやりたいことは何か」という積極的な意欲を持つことです。

大学は、そして文学部は、わかりきった答えや知識を与える場ではありません。あなた方ひとりひとりが、問題を見つけ出し、それに答えるために自発的に学問するための場です。積極的に好奇心旺盛な人を求めます。

【学部卒業生の産業別就職者数】

項目*	就職決定者数（人）						
	製造業	金融・保険業	運輸・通信	サービス	教員	公務員	卸売業・小売業・飲食店
令和3年度	7	8	13	10	12	39	8
令和4年度	7	11	20	18	6	29	5
令和5年度	9	8	20	28	8	21	9
令和6年度	11	10	23	27	5	27	9
令和7年度	12	14	16	30	5	26	8

*産業別分類の項目は抜粋



文学部の授業を 覗いてみませんか？

大学では自ら考える力が求められます。

考えることは問いかけからはじまります。

先人の智慧にならい、あるいはフィールドの現場から、問いを発し、考えを深めていくことが大切です。

小さな世界の中に大きな宇宙がおさまっていることもあります。

何気ない身の回りの日常が、不可思議な世界へと変貌することもあるでしょう。

専門を深めることは、決して他の分野の学問と無関係ではありません。

いろんな問いを結びつけ、知的冒険に旅立つのは、皆さん自身です。

先人たちの遺した文字や資料は、新たな世界へのよき道案内となるでしょう。

扉を開いて私たちと一緒に旅をしてみませんか。



つねに物事の根本に立ち戻り、 世界をひとつの全体として思考する

哲学とは何か

倉田 剛 (哲学・哲学史)

哲学とはいったいどんな学問なのでしょう？何やら難しそうな学問だというイメージはあったとしても、「**哲学とは何か**」という問いに答えられる人はそれほど多くないはずです。実は、哲学者たち、あるいは哲学研究者たちにとっても、この問いは決して簡単に答えられるものではありません。

私自身、大学で哲学を研究し教える身でありながら、ふいに誰かから「あなたの専門分野の哲学とは何をする学問なのか？」と問われると、しばし考え込んでしまいます。結局まとまりのない話をして、相手に煙たがられた末に、「簡潔で差し障りのない答えをあらかじめ準備しておけばよかった」と後悔することもあります。

しかし、哲学にはそうした**風変わりな側面**があることは

否定しがたいように思われます。つまり、哲学者にとっても、「哲学とは何か」は自明ではなく、それはたえず問いつづけられる問いとして残されているのです。これは「〇〇学とは〇〇について研究する学問だ」と即答できるような他の多くの学問とやや異なる点かもしれません。もう少しまともな言い方をすれば、哲学は、つねに自らの規定自体に意識を向けつづけるという意味で、すぐれて「**自己反省的**」な学問なのです。

とはいっても、私はこの文章を、これから文学部で学ぼうとする人たちに向けて書いていますので、以下では、「哲学とは何か」についての私自身の見解を、不完全な仕方ではありますが、述べておきたいと思います。

ある偉大な哲学者はかつてこのようなことを言いました。



▲東プロイセンの偉大な哲学者エマニュエル・カント(1724-1804)の像

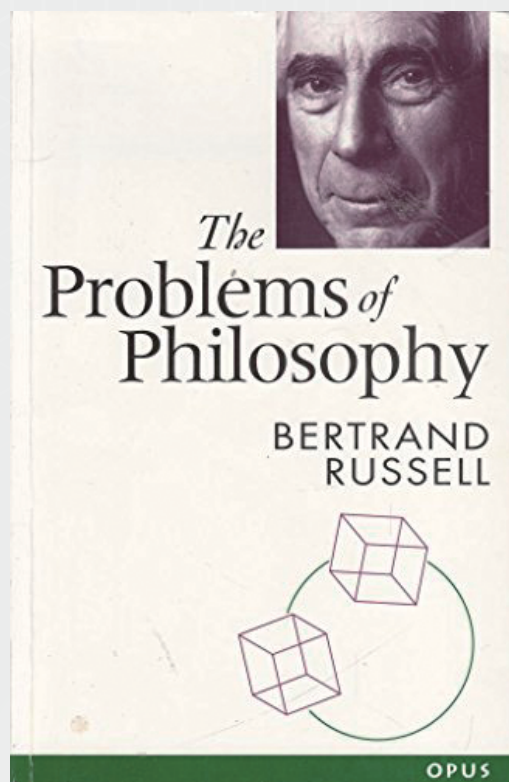
「哲学は教えることができない。教えることができるのは**哲学すること**だけである」。私はこの言葉を次の意味で理解することにしています。すなわち、哲学を学ぶときに重要となるのは、既成の知識を習得することではなく、**哲学的な態度**、言い換えれば、**つねに物事の根本に立ち戻り、世界をひとつの全体として思考する態度**を身につけることである、と。

哲学は、現在大学で学ぶことのできる学問の中で、**もっとも歴史が古いもののひとつ**です。しかし、よく知られているように、近世・近代と呼ばれる時代になると、**多くの「新しい学問」が哲学から袂を分かっていきます**。17世紀には自然哲学から「自然科学」（物理学）が分化し、18世紀には道徳哲学と経済学はそれぞれ別の道を歩みはじめ、さらに19世紀に入ると、様々な「人間科学」・「社会科学」（心理学や社会学など）が、相次いで哲学からの独立を宣言します。今日、これらの諸科学は高度に専門化された知識の体系を築き上げ、ミクロな素粒子から広大な宇宙の成り立ちに至るまで、あるいは私たちの心のメカニズムから社会の仕組みに至るまで、とても精緻な説明を与えてくれます。また、それらは未来に生じる事象をある程度の確度で予測する能力をもち、場合によっては、それを制御する力も有しています。こうした「力」を前にして、私たちは、科学に揺るぎない地位を与え、科学抜きには立ちゆかない時代を生きることになりました。

こうした時代において、多くの科学の母体となってきた哲学は、その役目を終えてしまったのでしょうか？哲学は、過去の偉大な哲学者たちがのこした言葉をたんに語り継ぐといった、「骨董的な価値」しかもちえないのでしょうか？**そんなことはありません**。なぜなら、たとえ科学が発展を遂げたとしても、いやむしろ発展すればするほど、そこに**哲学的な難問が立ち現れてくる**からです。宇宙の起源に関する壮大な理論は、観測された証拠（エビデンス）が仮説を確証するとはいかなることかという問いを誘発します。脳科学の発達、従来の「心」の概念をどう捉えなおせばよいのかという問いに結びつきます。遺伝子工学を応用して、特定の病気に罹りにくい人間をつくり出すことは、私たちを幸せにするのかという難問も、科学の発展から生じたものです。また、経済学が前提してきた「合理的な経済主体」、つまり自己の効用の最大化を目指す人間像は維持できるのかといった問いも真剣に問われなければなりません。

ん。これらはいずれも、**物事の根本に立ち返らなければ答えられない問い**であり、また、世界の特定の領域にとどまっていたは答えられない問い、言い換えれば、**世界をひとつの全体として捉えようとする態度なくしては答えようのない問い**なのです。これこそが、まさに私の言う「哲学の問い」です。

この文章を読んで、これから大学で学ぼうとする皆さん方の哲学についてのイメージは、わずかながらでも豊かになったでしょうか？私はそう期待します。しかし、「哲学とは何か」という問いに納得のいく答えを見いだすことができるのは、**最終的には、皆さん方一人ひとり**だと思います。私は、伊都キャンパスの研究室や教室で皆さん方と議論できることを楽しみにしています。



▲イギリスの哲学者バートランド・ラッセル(1872-1970)の『哲学の諸問題』(初版は1912年)。優れた数学者・論理学者でもあったラッセルは『プリンキピア・マテマティカ』(ホワイトヘッドとの共著、1910-1913)により現代数理論理学の領域に金字塔を打ち立てた。またラッセルは、第一次世界大戦に対する非戦論の主張でケンブリッジの教授職を解任され、投獄されたほか、第二次世界大戦後には核兵器廃絶運動にも積極的に関わり、自らが起草した「ラッセル＝アインシュタイン宣言」(1955)を発表したことで知られる。

「哲学とは何か」

—これ自体が哲学的な問題で、専門家でも答え方はさまざまだけれど、
「わかった気がする」の「気がする」や「なんかおかしい」の「なんか」をなくしていくことは必須。
そうしていくと結局、存在、知識、道徳、真理、価値といった根本的な問題を考えることになるんです。

吉原 雅子（倫理学）

お仕事は何を？と訊かれたら、倫理学と答えようか哲学と答えようか迷うのだが、まあ私のやっている倫理学は哲学の一分野なので、哲学を教えますと答えることが多い。するとかなりの確率で、「よくわかんないけど、難しそうなことをやってるんだねえ」という反応が返ってくる。どんな学問も専門的にやれば難しいんじゃないかと思うがそれはさておき、よくわからないのは、無理もない。だって、普通学問は「歴史学」「政治学」「心理学」「生物学」といったように、探究の対象がわかるような親切なネーミングになっているのに、哲学は「哲学」。「哲」について解明する学？もちろん違う。

この時点で哲学は新入生リクルートには不利な学問だと思うのだけれど、不思議なことに、哲学をやりますというカミングアウトに対して次に多い反応は、「俺も勉強したことある。あれだよ、知を愛する学問。」「価値観が多様化した時代だからね、生き方を考えることは大事だよ。僕の考えでは…」といったように、やや前のめりぎみに、知識や持論が語られるパターンだ。

奇妙な現象だ。同様の反応が他の学問、たとえば工学や法学、医学の専門家に向けられることはあるだろうか？普通の学問なら、専門家は、自分の知らないことをしている人として一定の距離感を持って接せられると思うのだが、哲学はなぜかその距離感を一気に詰め寄られるのである。残念ながら、それで哲学談義が盛り上がるということは稀なのだけれど。（知を愛しているのはどの学問でも同じだし、哲学を何年やっても私はいまだにうまく生きられていない。）

以前、こんなTV番組があった。「お金とは？」「命とは？」といった抽象的なお題が与えられ、ゲスト達が、「～である。」と思い思いの定義を披露する。ここで、お金とは財やサービスの交換手段となるもので…、とか、命とは動物や植物といった生命体の…、等と答えることは許されず、「名言」を述べなければならない。たとえば「人生は、自

動販売機のようなものである。なぜなら、…」といった具合だ。そうして、最も「上手いこと言った」ものがその日の正解として選ばれる。TV番組の名前は、「哲学大王」。哲学って、大喜利だったのか？！

世間の哲学のイメージは、私の知っている哲学とはずれているようである。知識、命、愛や友情といった人生における価値について、含蓄ある言葉で深いことを語るのが哲学。そんなイメージが見て取れる。

もちろん、TV番組としての面白さを追求する限りではこれでも全く問題ないのだが、大学の「哲学」にこういったイメージのものを期待するのは危険である。既に期待してしまっている人には申し訳ないが、私が哲学の授業で最初に取り上げるテーマは「ロウソクの火は消えたらどこへ行くのか」だ。見ようによっては深遠な香りのする問題だが、これに答えを出したからと言って人生の意味がわかるわけではないし、生きる指針が得られるわけでもない。だがそこは問題ではない。というのも、**哲学とは、むしろ「深遠そうに見える問いを、シンプルで明晰なものへと解きほぐしていく」もの**だからだ。（ちなみに、この問題は私が大学1年生



▲プラトンとアリストテレスで哲学の問題と基本的な考えはほぼ出尽くしていると言っても過言ではない。2000年以上も同じ問題が考えられてきたのは、哲学が「成果だけ引き渡して続きからやってもらおう」ことのできない学問だから。解くべき問題や混乱は、自分自身の中にある。

のときに哲学の授業で最初に考えさせられた2題の内の1題なのだけれど、もう1題は「ラーメン2杯食べた後にタンメン10杯食べると神様に命じられたら食べないといけないか」だった。「タンメン」という語のチョイスで既に深遠さゼロである。)

哲学が扱う概念の定番は、愛、知識、存在、心、認識、科学、真理、自由、道徳といった、抽象的でありながら私たちの生に深く関わるものだ。深く関わるからこそ、多くの人にとって哲学は身近なものに感じられ、「自分なりの哲学」を語りたくなるのかもしれない。けれど、哲学は、それっぽいことや気の利いたことを言うものではない。曖昧な理解や無意識の前提に目を向け、それを論理的に整理しなおすことによって、明晰にしていこうとする営みである。

これは哲学が実は身近なものではない、ということではない。文学作品の中にも、友人との会話の中にも、哲学的な問題は沢山ある。ただ、それを「哲学」として意識しないままに通り過ぎているだけである。

「ロウソクの火は消えたらどこへ行くのか?」、これは実は、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』の中でアリスが考えたことだ。『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』には哲学的なジョークやユーモアが満載だ。「アリス、赤の王様は君の夢を見ている。君は王様の夢の中にいる。だから王様が目を覚ましたら、君はもうどこにもいなくなるんだ!」とか、「その歌の名前は『タラの目』と呼ばれている。歌の名前そのものは『年寄りの男』。その歌は『方法と

手段』と呼ばれている。」「で、いったいその歌は何なのよ」などなど—こうしたセリフを、私たちはクスッと笑って読み流す。どこかがおかしいからクスッと笑う。しかし、どこがおかしいのだろうか?それを考えだしたら、哲学の入口に立っている。説明したら、「哲学している」。そういうことだと私は思う。

もう一つ例をあげよう。哲学入門の授業で「次の時間の回りの回りから哲学的だと思う問題を見つけて来て」と宿題を出して、集まった問題を皆で解いてみたことがあるのだが、この時最も盛り上がった問題は、「ドーナツを穴だけ残して食べるのは可能か」。これ、チェシャ猫がニヤニヤ笑いだけ残して消えた、って話と、よく似ているではないか。

実際には「ロウソクの火は消えたらどこへ行くのか」という問題に取り組んでいる哲学者はいない。専門的に研究される哲学の問題は、「文の真偽は事実との対応により決まるのか」とか「倫理規範には根拠があるか」といった、より一般的な、そしてよりトリックの所在が見抜きにくい手強い問題である。でも、本質的な部分は同じだ。「一冊まるまるジョークで書かれた哲学書もありうる。」これは有名な哲学者、ヴィトゲンシュタインの言葉だ。笑って終わるか、気になって解明するか。もしあなたが後者のタイプならば、大学で学ぶ哲学は楽しいと保証する。少なくとも私の授業で「ロウソクの火は消えたらどこへ行くのか」の哲学的な答え方を知ることができます。気になる方は是非九州大学へ!



▲ニヤニヤ笑いを残して消える猫。テニエルはなぜよりもってこの場面の絵を描こうと思ったのか。無理に決まってる。でも、なぜ無理なのか?



▲「赤の王様がアリスの夢を見ているのか、それともアリスが王様の夢を見ているのか」

荘子の「胡蝶の夢」も似てるけれどちょっと違う。

映画「マトリックス」(ただし1限定)や「トータル・リコール」もお勧め。

過去と現在との対話

「年表を暗記するのが嫌いなので、歴史は苦手だ」と思っている人もいるでしょう。

大丈夫、大学の歴史学は、そのようなことは要求しません。

研究室で、皆さんの先輩がやっていることを紹介してみましょう。

歴史学・考古学・人類史

辻田 淳一郎（考古学）

歴史学コースが対象とするのは、文字通り人類の歴史です。歴史学あるいは文献史学以外にも、人類の過去に接近する方法にはいくつかありますが、そのうちの一つが考古学と呼ばれる分野です。

文献史学と考古学のいずれも人類の歴史を説明するという点では共通していますが、大きく異なる点があります。それは、対象として扱う資料／史料の違いです。

文献史学では、主に過去の人類が残した文字による記録（史料）および関連する資料にもとづいて研究が行われます。これに対して考古学では、過去の人類が残した物質的な痕跡をもとに人類の過去についての研究が行われます。「物質的な痕跡」とは、例えば生活の痕跡として残された集落や、人々が埋葬された墓地、神殿などのモニュメントの遺跡などを指します。そこでは道具を製作した場所や人々の信仰の場などが見つかることもあります。中国・秦の始皇帝陵の近くから見つかった有名な兵馬俑も、文献史料にはその記録は残されていません。考古学はそのような「遺跡」から人類の歴史を研究する学問分野ともいえます。

また文字による記録があれば、人類の歴史が全て明らか

にできるかという点必ずしもそうともいえません。文字による記録では、それを書き記した人間が記録に値すると意識しなかったことは書き残されないことがあります（逆にメモやレシートのようなものが貴重な情報源として残ることもあります）。その記録された内容が全て事実ともかぎりません。人類の歴史は初期人類の歴史から数えると約700万年ともいわれますが、文字による記録があるのはそのうちの約5000年間に過ぎません。しかも世界の全ての地域で同時に文字の使用が開始されたわけではなく、最近まで文字が使われていなかった地域もあります。

考古学では、文字による記録がない時代（先史時代）から近現代までのすべての時代を対象として扱います。江戸時代や明治時代の「遺跡」から、文献史料に記録されていない人々の歴史が明らかになることも少なくありません。この意味で、考古学は研究対象として時代・地域・文化を問わない（＝あらゆる時代・地域・文化を対象とする）のが特徴ともいえます。世界各地の人類の歴史をトータルに説明するためには、歴史学と考古学を含めたさまざまな分野のアプローチが必要となります。



中国陝西省西安市・秦始皇兵馬俑博物館



6世紀の古墳の調査(福岡県桂川町天神山古墳)

歴史学とはどんなものか

清水 和裕 (イスラム文明学)

私たちは、なぜここでこうやって生きているのだろうか。人文科学が常に求める問いに、歴史学は「時間」の軸から迫っていこうとします。日本人が「日本人」と呼ばれるようになったのはいつからなのだろう。そもそも「日本人」「中国人」「アラブ人」とは、誰のことなのだろうか。私たちがふだん当たり前のように思い込んでいることひとつをとっても、実は答えは自明ではなく、極めて複雑な歴史を持っています。歴史学は、そういった「当たり前の思い込み」をひとつひとつ丹念にとらえ、「当たり前」が生まれてきた経緯や状況を明らかにし、その理由に答えようとしています。

例えば中国、エジプト、イギリスといった世界各地の人々が、千年まえに、どのような社会に生きていて、何を考えて町を歩き、何をたべておいしいと思っていたか。そんなことを明らかにするのは並大抵のことではありません。しかも、そういった人々の日々の営みが、いま現在の私たちの世界を生み出したのです。**現在の私たち、現在の世界の隣人た**

ちの事を知るには、過去の私たち、過去の彼らを知る必要があります。

大学の歴史学の講座では、それぞれの学生が自分なりにそのような「なぜ」「どのように」を見つけて、先人の研究成果と取り組み、また過去の史料と直接向きあって、その答えを探し求めています。そのために、古い草書体の古文や、漢籍、また韓国語、アラビア語、ドイツ語、ラテン語など様々な言葉を駆使して、外交文書や日記、年代記、地理書、宗教文書や法令集、果ては文学作品などの原典史料と格闘するのです。

史料をひもとき、先人の研究の蓄積を読み進め、自分の解き明かすべき問題を見つけ、そして答えを手に入れる。そのなかで、遠い時代のある社会に生きていた人々が、何を考え、感じていたか。そして、それはどういった時代の流れを生んでいったのか。そういった謎が少しずつ明らかになっていくのを感じることでしょう。



イスタンブールのアヤソフィアの姿からは、ビザンツ帝国の大聖堂とオスマン帝国のモスクのふたつの歴史を見ることができる。

気づきの契機としての歴史

森平 雅彦（朝鮮史学）

「今」の人間社会を深く理解するため、過去に遡ってその姿を確かめ、現在までの「流れ」をたどるという前項のお話以外にも、歴史学にはもう1つ、「**気づきの契機**」という大切な役割があります。

たとえば、現在私たちは、労働や土地、貨幣などあらゆる価値が市場メカニズムに組み込まれた社会で暮らしており、多くのことを商品として取り引きすることに慣れきっています。しかしポランニーという人類学者は、18世紀の西アフリカで栄えたダホメ王国の非市場経済的な社会の分析を通じ、市場経済に支配された現代社会が、長い人類の歴史のなかでも特異な存在であることを指摘しました。

あるいは、今私たちが所用で隣町に出かける際、途中で何回川を渡り、その川の水位がどうなっているかを気にすることなど、ほとんどないでしょう。しかし戦国武将が軍事連絡のために出した手紙には、雪どけ、長雨などによる川の増水に関する言及がちよくちよく現れます。今なら存在すら意識せずに通り過ぎるような川も、頑丈な橋がかけられる以前は、渡るのはいちいち大ごとで、ちょっと水かさが増せば向こう側に行けなくなる。そのため、どんな名将であっても気かけざるを得なかったわけです。これを通じて私たちは、何気ない今の生活が、橋をかけて維持管理してくれている誰かによって支えられていることを、改めて認識することができます。

このように私たちは、過去の社会——自国であれ、縁もゆかりもない地域であれ——の一場面を目をとめるだけで、「今の自分たち」の姿を相対化して、日々の暮らしのなかで見落としている大切なこと、当たり前だと思っていることが当たり前ではないこと、特別だと思っていることが実は特別ではないことなど、さまざまな「気づき」を得ることができます。

ダホメ王国も、戦国武将の手紙も、学校の授業で触れることはおそくないでしょう。みなさんのなかには、史実には必ず知るべき重要なものと、そうではないものとが既に確定していて、歴史教科書がとりあげる地域や集団、時代、個別の出来事は、重要なものを網羅しているのだと思い込んでいる人がいるかもしれません。しかし教科書の裏には膨大な史実が一言も触れられず、あるいは存在を知ら

れることもなく、埋もれています。そのどれが大切な「気づき」につながるかは、関心の持ちかた次第で無限の可能性があります。**現在の社会や未来に対する自分なりの問題意識のもと、それに関する歴史への新視点を開拓し、知るに値する史実を「発見」し、新たな「気づき」を得ることは、歴史学の大事な役割の1つです。**

そもそも歴史学はそうやって発展してきました。はじめは政治過程や戦争などの「大きな事件」が注目されましたが、社会科学の発達とともに社会の深層構造を論じるようになります。また男性中心社会への反省から女性史、ジェンダー史が生まれ、近代文明がもたらした環境問題に直面することで、人間と自然の関係を省察する環境史が生まれました。それまでになかった着眼点が、後から次々に「気づかれて」きたのです。

さまざまな地域、時代に生きた人びとの多彩な経験に触れ、想像もしなかった考え方・振る舞い方の存在を知ることとは、**この先、未知、未解決の課題に向き合っていかなければならない私たちにとって、視野を広げ、狭い常識にとらわれない柔軟な思考を育み、発想の引き出しを豊かにしてくれる導きになるはずです。**

そうした新発想につながる史実は、教科書では一切取り上げられていない地域や集団のなかに、また教科書で取り上げられている地域・集団であっても記載されていない事柄のなかに、どれだけ潜んでいるかわかりません。**史実の価値は前もって決まっているものではありません。探究する者が自ら歴史に問いかけて新たに「値付け」していくものなのです。**

[参考文献]

カール・ポランニー『経済と文明—ダホメの経済人類学的分析』（栗本慎一郎・端信行訳、ちくま学芸文庫、2004年）

齋藤慎一『中世を道から読む』（講談社現代新書、2010年）

知的冒険のすすめ

文学作品を読み解く作業には、予想を超えた困難がつねにともなう。

しかしそれを克服して得られる発見の悦びは深く、筆舌に尽くしがたい。

対象となる文献も研究の方法も多種多様であるが、文学の研究とはこのような悦びを共有する、
きわめて実践的な学問なのである。

テキスト校訂の醍醐味

高木 信宏（フランス文学）

文学の研究には、書物の校訂というものがある。古典などの本文を、異本と照らし合わせて厳密に訂正する仕事である。中世の写本ならばともかく、出版文化が興隆する近代以降の書物であれば、このような作業は不要と思う向きもあるかもしれない。だが、現代の文学を扱う場合でも、校訂者が困難に直面することはままあるのだ。

たとえば、名うての難題としては、20世紀フランスの文豪マルセル・ブルーストが上梓した『失われた時を求めて』の事例が挙げられる——「そのとき叔母は、蒼白く生気のない哀れな額を私の唇のほうに差しだすのだが、朝のこの時刻ではまだかつらの毛を整えていないので、額のうえにはまるで茨の冠のとげや数珠の玉のように椎骨が浮き出ている」^{ロザリオ}。これは同長編小説の第1篇『スワン家のほうへ』に登場するレオニ叔母の描写であるが、脊柱を形成する「椎骨」が額に浮き出ることなど、解剖学的にはありえない。ブルースト自ら校正した1913年刊行のグラッセ初版以降、こ

の奇妙な記述は各版に受け継がれていくのだが、その間に文言の是非を問う研究者の議論は白熱し、1987年にガリマール社から出されたプレイアッド新版では、ついに斯界の泰斗ジャン＝イヴ・タディエが果断にも元の本文を常識的な表現に訂したのである。つまり「額」ではなく、「かつら」から「椎骨」状のものが覗いているというように。

しかし、これで問題は決着を見たのではなかった。面白いことに、近年の草稿調査にもとづく再検証によって、いまや本来の表現を是とする説が優勢になりつつある。

もちろん、こうした話は『失われた時を求めて』だけに限らない。**ふだん読んでいる名作の一言半句も、じつは研究者の地道で綿密な校訂の作業を経て活字になっているのだ。**さて、皆さんにも、現代文学の最高峰に数えられるブルーストの傑作を味読しながら、この箇所に入れられた作者の真意について考えてみて欲しい。



◀ 出典：ブルースト『失われた時を求めて』（吉川一義訳）、岩波文庫、2010年

メールヒェン研究「水の女」の物語

小黒 康正 (ドイツ文学)

ヨーロッパ文学における「水の女」の系譜は、古代ギリシア神話を水源とする。もっとも、ホメロス『オデュッセイア』に登場したセイレンは、古代末期以降、キリスト教のもとで姿を変えていく。もはや「美しい声」で誘惑する半人半鳥ではなく、「美しい姿」で誘惑する半人半魚へと変容するのだ。その後、「水の女」の系譜は、中世やルネサンス期の民間伝承や民衆本を経た後、近代ドイツのメールヒェンにて川幅を広げ、更にデンマークへと至り、世界文学という海原に流れ出ていく。

こうした流れの中で、近代ドイツ文学の役割は大きい。「美しい声」と「美しい姿」を併せ持つウンディーネ、メルジーネ、ローレライがたえず姿を現すからだ。セイレンの後裔^{えい}たちは、明るい海原ではなく、奥深い森の湖沼に現れるようになると、文学において内面化された「他者」と化す。「水の女」の系譜は、近代ドイツ文学において、「未知なる他者」のみならず、「未知なる自己」をも取り込みながら、「水の深さ」が「心の深さ」となる現代的な「他者」経験を問題にしてい

近代ドイツ文学の新たな潮流は、デンマークのアンデルセンに多大な影響をもたらす。そのとき最初に成立したのが、『人魚姫』(1837年)であった。但し、この物語は、「美しい声」の喪失物語として、「陸の男」と「水の女」の言語的意思疎通の破綻を三重に描く。海上であれ、陸上であれ、空中であれ、両者の言語的断絶は深い。「美しい姿」の人魚姫が「美しい声」を失うことの意味は、あまりにも大きいのだ。

その後、『人魚姫』が逆にドイツ文学に多大な影響をもたらす。現代ドイツ文学において、言語による意思疎通の破綻は先鋭化が進み、しかも既存の言語が原理的機能不全に陥っていく。但し、このような絶望的状况のもと、新しい文学の模索が始まる。「水の女」の物語は、既存の世界にいる私たちに、新しい男女のあり方、新しい言葉、「どこにもない場所」の模索を促す。私たちは今、新たな大海原の前にたたずむ。

文学は「ユートピア」である。



▲ 紀元前370年頃のセイレン像
(ギリシア国立アテネ考古学博物館蔵)



▲ ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス『人魚』
(1900年)

過去のことを再構する

言語の歴史を再構するには、過去の文献資料を用いる必要があります。

しかし、文献資料に現れた例を年代順に並べるだけでは、言語史にはなりません。

当該の文献資料は、どのようにして作られ、どのような言語が反映しているのか。

文献資料に透けて見える、当時の話しことばを繋ぎ、言語史を構築していきます。

ことばの歴史を探ることで、
ことばの仕組みを知り、
人間の営みを学ぶ。

青木 博史 (国語学)



図1:『竹取物語絵巻』(九州大学附属図書館蔵)

(1)今は昔、竹とりの翁といふ者ありけり。

この1文は皆さんご存知の通り、有名な『竹取物語』の冒頭です。現代語に訳すと、以下のようになるでしょう。

(2)今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。

現代語訳は、古典語を現代語に置き換える作業です。そのままでは理解できないことばを、理解できることばに置き換えているわけです。しかし、考えてみれば、両者は同じ日本語です。したがって、(1)と(2)の相違は、**時間を経て日本語が変化した**ことを示していることになります。

まずは述語の部分に注目してみましょう。「ありけり」は「いた」に変わっています。現代語では、モノが“存在する”ことを表すときには「ある」を使いますが、ヒトが“存在する”

ことを表すときには、「ある」でなく「いる」を使います。しかし、どうやら古典語では、ヒトの場合も「あり」を使ったようです。だとすると、いつ、どのようにして「あり」は「いる」に変わったのでしょうか。——こうして、**ことばの歴史的研究**はスタートします。

確かに、現代の我々からすると、ヒトに「ある」を使うのはおかしいと感じられますが、昭和時代の文献を見ると、ヒトに「ある」を使うこともまま見られます。

(3)むかしむかし、あるところに爺さんと婆さんがあった。

(『日本昔ばなし』)

ただ、どんな場合でも使うことができたわけではなく、「昨日は1日中家にいた」という場合は使えません。どういう条件があったのでしょうか。

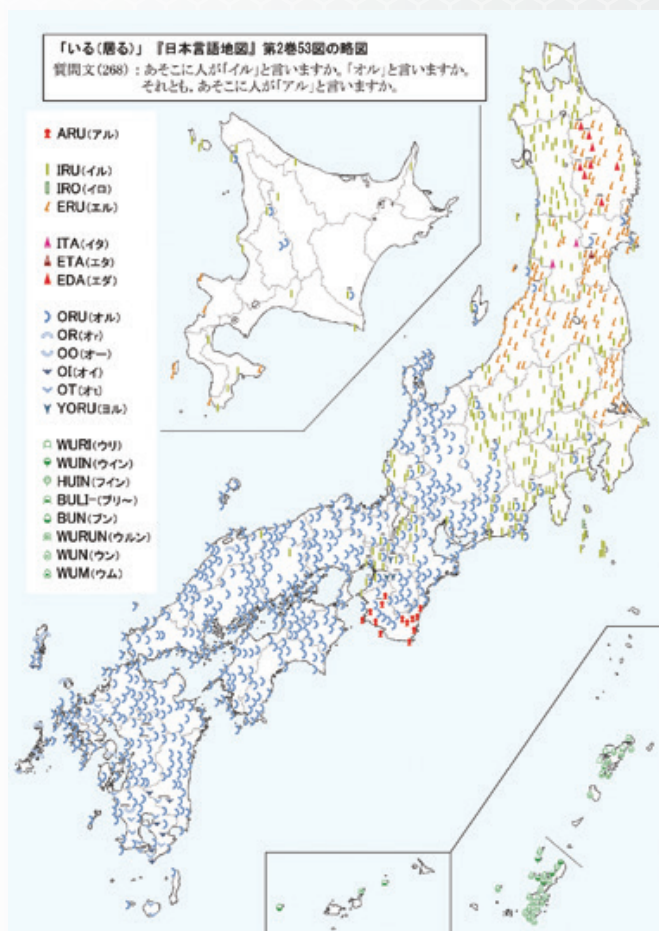


図2:「居る」を表す方言の全国分布(東西対立型)

また、九州をはじめ、西日本方言では広く、ヒトが“存在”を表すときには、「おる」を使います。

(4)竹取の翁という人がおった。

時間的な変化に加え、空間的な変異も視野に入れると、「存在」表現は「ある」「いる」に加え、「おる」も仲間に入ってきます。なぜこうした歴史的变化が見られ、なぜこうした地理的変異が見られるのでしょうか。

こうして我々は、“いつ、どのように”という疑問からさらに進んで、“なぜ”という疑問へと進みます。さらに、(1)と(2)の相違をめぐる“なぜ”は尽きません。「ありけり」は「あった」と訳されるように、「けり」は“過去”を表します。しかし、古典語において“過去”を表す語としては、「き」があったことも我々は知っています。また、“過去”とは異なる“完了”を表す「つ」「ぬ」があることも知っています。しかしながら、これらは現代語訳ではすべて「た」です。この相違は何を示すのでしょうか。歴史的变化だとすれば、「き」「けり」「つ」「ぬ」はすべて「た」に取って代わったことにな

るのでしょうか。では、いつ、どのように、そしてなぜ、そのような変化が起こったのでしょうか。

またさらに、「…という者がいた」のように、(2)には主語を表す「が」がありますが、(1)にはこうした「が」がありません。これは偶然書き忘れたのでしょうか、それとも古典語には主語を示す助詞がなかったのでしょうか、主語の「が」は新しくできたのでしょうか。だとすれば、それは、いつ、どのようにして、なぜ?—

このように、ことばの歴史をめぐる“なぜ”は尽きません。重要なことは、いま使っている現代語、共通語にしても方言にしても、**歴史の中の1コマ**であり、常にその変化の最中にあるという点です。ことばが新しく生まれ、広く通用し、またあるものは使われなくなっていく。こうした**歴史的展開の中でことばを理解することこそが、ことばの仕組みを知ること**だと私は思います。

そして、このように、ことばを自在に使ってコミュニケーションを図ることができるのは、人間のみです。**ことばの歴史を説明することは、人間の営みの歴史を説明すること**に他なりません。国語学講座では、我々にとって最も身近な、日本語を対象として研究しています。「ことば」を通じて、人間の本質とその営為を、共に探求していきましょう!

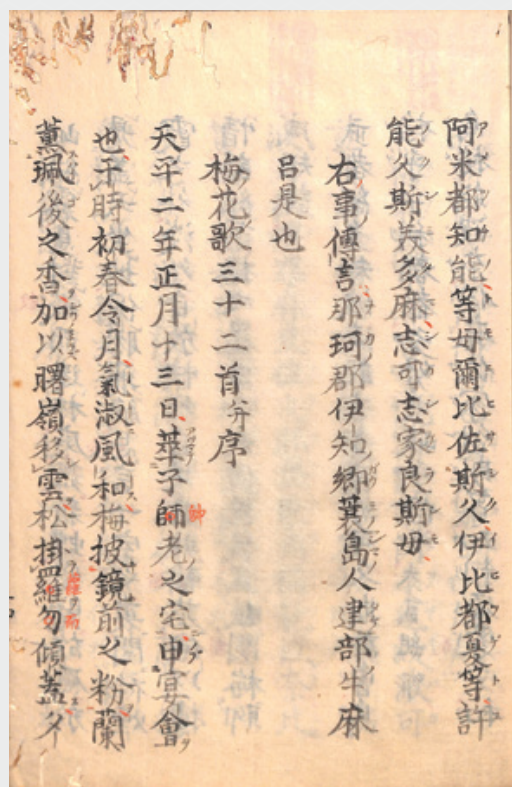


図3:『万葉集』(九州大学附属図書館蔵)

はじめの一步

いま、目の前に生きている人を研究するのが人間科学コースの特徴になる。

これまで「同じ人間」と見ていた人が、実は全く異なる世界の認識をしているかもしれない。

これまで「まるで違う」と思っていた人が、実は自分とそっくりな世界を生きているかもしれない。

今自分が生きているこの世界で、よりよく生き直すには、そのアプローチ(接近法)を学んでゆくことから始めよう。

身を重ねてみる

飯嶋 秀治 (比較宗教学)

かつてゲーテは「外国語を知らない者は自分自身の言語について何も知らない」と書いたことがあった。外国語を知って初めて、自分自身の言語についても自覚できるようになる。逆に言えば、外国語を知るまで、それ以外の言語は知らないのだから、自分が他にもあり得た言語の1つを話しているのだと自覚することもない、ということであろう。これは言語だけのことでなく、人生そのものにも当てはまるだろう。**「他の人生を知らない者は自分自身の人生について何も知らない」**。比較宗教学はこの「他の人生」を学ぶ場である。

研究室では時たま、中庭に出て「ブラインド・ウォーク (Blind Walk)」というレッスンを行うことがある。眼を瞑り、中庭を歩いてみるのである。このレッスンをやる前、多くの学生たちは、眼を瞑ってしまえば、何も見えず、動けなくなるに違いないと思って驚く。けれども、眼を瞑ると分かる。どちらの方向が明るいのかは知ることが可能なのだ。中庭からは木々の葉がこすれる音がする。そちらの方向に一步踏み出せば、頬には風が当たり、どちらが外なのかも分かる。季節が季節なら、花の香りがしてくるかもしれない。こうして私たちは知るのである。ブラインドになって、現われてくる世界もあるのだということを。眼を瞑っても、世界が失われる訳でもなく、様々な光の風景、音の風景、風の風景、香りの風景があり、私たちはそうした世界を生きることも可能であったということ。そうして私たちは、**目を瞑る前の自分が一つの思い込みの世界に住んでいたこと、別様の世界に住むことも可能であること、「自分自身の人生」はその可能性の一つの世界でしかなかったことを知る**のである。

だから私たちの研究室では、様々な当事者に**「身を重ねてみる」**。異なった時代の、別の世界に生きた人間たちの

書物を読み、異なった境遇に生きる人たちの暮らす現場に出かけ、そこに住む人たちに「身を重ねてみる」のである。するとその人生は二倍にふくらむ。向こう側の世界と、こちら側の世界を知り、その行き来ができるようになる。少し前まで、自分自身もそうしていた、「思い込み」の世界に住んでいた人々に、もう一つの世界のあり方も可能であることを伝えることができる。「宗教」というのはそうした「もう一つの世界のあり方」の1つでしかない。けれどもそこには、長年、多くの人々が苦悩から解放された知恵が累積している「もう一つの世界のあり方」があるのである。では身を重ねることでどこまで接近できるのだろうか。と考え始めたあなたは、もう一步を踏み出したのである。



平凡と思われた道草にさえ
『身を重ねてみる』ことは可能だ

認識のあり方

なぜ人は見間違いを起こすのでしょうか。
なぜ無意味な模様の意味を見出すのでしょうか。
その背後にあるこころの働きを考えてみましょう。

意味を見出すこころの仕組み

山本 健太郎 (心理学)

あなたは幽霊の存在を信じますか?このような問いを投げかけられると、おそらく多くの人は非科学的だと否定するでしょう。しかし一方で、霊を見たという報告は非常に多く、現在でも後を絶ちません。もちろんこれらは思い込みであったり、偽物であったりというケースがほとんどです。とはいえ、じゃあやっぱり幽霊は居ないんだ、と思考を止めてしまうのではもったいないかもしれません。もし実際には居ないとしても、「ではなぜ幽霊を見たと感じるのか?」という問題は残ったままであり、そこから**人のこころの本質に迫**

ることができるかもしれないからです。

図1は、NASAのバイキング1号が1976年に撮影した火星表面の写真です。よく見ると、中央の上方に人の顔のようなものが写り込んでいます。この写真が公開された当時は、火星人の遺跡ではないかといった憶測を呼んだそうですが、実際はくぼみや影がたまたま顔の輪郭やパーツの配置と重なってそう見えるだけで、高解像度のカメラで撮った最新の写真ではただの岩山であることが示されています。しかし、そうはわかってはいながらも、人の顔っぽいという



図1:火星の面人岩(Face on Mars)

印象をぬぐい去ることはなかなかできません。どうも私たちは無意味なパターンにも、何かしらの意味を見出す性質を持っているようです。

同様の性質は、星空を見たときにも感じ取ることができます。例えば月の表面に見える影の模様は、実際には無意味なパターンですが、日本では餅つきをするうさぎの姿として見立てられています（図2）。また無秩序に配列されている星をつなげて、さまざまな星座を思い描くこともあります。興味深いのは、このような形で秩序づけられたパターンは、元の無秩序なパターンよりも把握しやすく、記憶にも残りやすいということです。私たちの脳は、ばらばらな要素をまとめて全体として捉えることで、**ものごとを効率良く処理しようとしている**のかもしれません。

また人は特定の配置パターンを、「顔」として素早く処理してしまう性質があるようです。図3は、どちらも同じ要素（四角と丸）で構成された単純なパターンですが、左側の絵のみが自然に顔として認識され、強く注意が惹かれます。しかもこの性質は、生後1年未満という幼い時期から生じることも研究で示されています。顔を素早く検出することは、他者に反応したり表情を読み取ったりする上で非常に重要です。そのため、目や口といった特定のパーツの配置情報から、顔を自動的に認識するような仕組みが生まれながらに備わっているのかもしれません。その副作用として、私たちは意味の無い類似パターンにも顔を見出してしまうのではないのでしょうか。

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」という有名な句があります。幽霊だと思って怖がっていたものが、よく見ると枯れたススキであったという話です。この言葉にも、人が恐怖心や思い込みから何でもないものに意味を見出してしまうという性質がよく表されています。**人の認識は一様ではありません**。そこには、過去の経験や周囲の状況などのさまざまな要素が複雑に絡み合い、影響を及ぼしています。どのような情報が人の認識を定めるのかについて、皆さんもぜひ一緒に検証しましょう。



図2:月の表面に見えるうさぎ

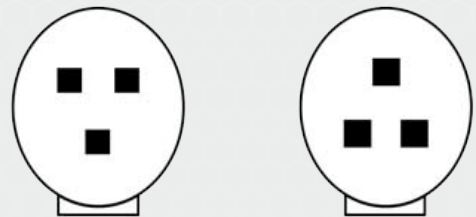


図3:同じ要素で構成される二つのパターン



先輩からのメッセージ

文学部、そして中国哲学のおおらかさ

哲学コース

石野 愛華 Aika Ishino

中国哲学史 2022 年度入学



九州大学の文学部にはたいへん魅力的な専攻分野が揃っており、何を選ぶか迷われる方も多いかと思います。じっさい、入学の時点では専攻をすでに決定している人、まだ学びたいことが見つからない人、なんとなく方向性は決まっているけれど具体的な分野が決まっていない人など、さまざまです。1年次の基幹教育を通じてじっくり自分と向き合い、時間をかけて専攻を決定できるのが、九州大学文学部の強みのひとつです。また一度専攻を決定しても、ほかの分野の講義にも原則として自由に参加できるので、どんどん自分の世界を広げてゆくことができる学部でもあります。私は中国哲学史研究室に所属していますが、専攻分野にとどまらないたくさんの領域についての講義を履修してきました。具体的には西洋の哲学や日本中世史、アジアの考古学、宗教学、ドイツ文学、ラテン語にいたるまで、人文学を形成するさまざまな分野に触れ、刺激的な文学部生活を送っています。

自分自身、専攻を決定したのは入学後でした。1年次のときに参加した講義で、中国哲学史という学問の深淵さを知ったことがきっかけです。中国哲学史講座では、おもに儒教や道教といった中国の伝統思想や東アジアにおけるその影響を対象にした研究が行われています。やや堅苦しく権威的な印象を受けるかもしれませんが、中国哲学は近代的・西洋的なものの見方のなかで生きる我々の世界をさらに広げてくれる学問であり、何よりも儒教は日本人の精神性形成にも深い影響を与えてきた思想です。ちなみに私は、明代末期から清代にかけての中国におけるイエズス会宣教師たちの布教活動について研究しており、儒教とカトリックというふたつの思想

体系の邂逅と互いへの反応について紐解くことを試んでいます。

儒教の祖である孔子は紀元前500年前後、つまり今から2500年ほど前の中国を生きた思想家です。数千年の歴史を経て今に伝わる思想は、それだけ多くの人の共感を集め、愛されてきた思想ということでしょう。そんな彼らのことばは、時に現代社会で思い悩む我々の励ましとなり、ヒントとなることがあります。学問をしているうえでふっと救われるような気持ちになる分野というの、なかなか珍しいのではないのでしょうか。

九州大学の文学部は長い伝統に基づいた膨大な資料を揃えており、どのような専攻分野でどのような興味・関心を抱いたとしても自由に研究を行える環境が整っています。皆さんにもぜひ自然豊かなキャンパスで、のびのびとした大学生活を送ってほしいと願っています。

モノに触れる学問

歴史学コース

北村 仁乃 Nino Kitamura

考古学 2022 年度入学



私は歴史学コースの考古学研究室に所属しています。考古学では、歴史書のような文字資料ではなく、土器や古墳などの「モノ」を使って歴史を研究していくことができます。そのような「モノ」はそれ自身では歴史を語ることはできないので、研究者がどのようにそれらに語らせるかが大事だと考古学ではよく言われています。

研究室の授業では、考古学の研究手法や学史について学ぶ講義や、論文の要約と批判をする演習、英語・韓国語の文献を読む講読などの授業があります。九州大学の立地を活かして中国・韓国考古学について学ぶ機会も多くあります。また、研究室が所蔵している遺物について調べる授業や、遺物の図画の方法を学ぶ実習の授業では、実物の土器・石器などに触れることもできます。長期休暇の時期に研究室で古墳の発掘調査が実施されることもあります。このように、実際に遺跡に直接行ったり実物の遺物に直接触れて近くで観察したりする機会もたくさんあり、そこで図や写真からでは得られない情報を得ることができます。このように直接的な観察を行って

資料から情報を読み取っていくのが考古学の面白い点だと思います。

また、どの研究室に配属されても卒業論文と研究は行わなければなりません。考古学研究室でも、研究室での授業を通して獲得した知識やスキルを使って、自分なりの問題意識のもと卒業論文を書いていきます。授業で習った専門的な知識をフルに使って新しいことを提示していく経験は、研究者にならなくても将来に有用な経験だと思います。実際に卒業論文を書いてみて、本当に小さな新しい発見を提示するだけでもかなり大変だと感じました。今まで教科書で習ったような史実は、先行研究のこのような途方もない研究の積み重ねで生まれたんだと実感できます。

以上のように、研究室では授業を通して得られた知見で自分の将来に生きる研究をすることができます。皆さんが研究を楽しみ、豊かな大学生活を送ることを願っております。

文学部の学びが与えてくれる気づき

人間科学コース

保坂 柚花 Yuzuka Hosaka

言語学 2023 年度入学



「言語学」と聞いて、どんなイメージを持つでしょうか。とにかく色々な言語を学んでいて、何か国語も喋れるようになる…そんな想像をする人もいるかもしれません。しかし、実際は違います。

言語学とは、簡単に言えば言語の構造や使われ方を科学的に分析する学問です。私が所属している人間科学コースの言語学・応用言語学研究室では、中学・高校までの英語の授業のように各言語の正しい使い方を学ぶのではなく、言語がどのように成り立っているか、その仕組みそのものを多角的に研究しています。

たとえば現代日本語に焦点を当て、単語の意味や使われ方を分析して分類したり、フィールド調査を通じて方言の文法構造を記録したり、言語活動に脳がどう関わっているのかを実験を通じて研究している先生もいます。

私は「言葉を研究するのって面白そう」という単純な興味で言語学を志望したのですが、実際に研究室に入って学んでいくうちに、思っていた以上に奥が深い学問だと気付きました。私たちは母語を話す時、特段文法や規則を意識して喋っているわけではありません。しかし少し深堀してみると、言語には非常にシステマチックに説明できる側面が多くあります。普段何気なく使っている言葉が実は複数の規則の上に成り立っているのだと気付くことができ、そしてそれを理論的に説明できるようになるところに、言語学の面白さがあると私は感じています。それでいて、言語は生き物ですから、時代の変化や文脈に応じて違った様相を見せることもあり、すべてが単調に説明できるとは限らないのも面白さの一つです。

では、この研究は何の役に立つのか?と思う方もいるでしょう。私も実際、聞かれたことがあります。確かにこの研究によって実用的なモノを開発できるかという点、そうではありません。これは言語学に限らず、文学部に

所属する学問すべてに共通して言えることだと思います。しかし、文化の解明や記録、保存という側面では、非常に重要な役割を果たしていて、決して無意味なものではないと私は考えています。それは今後の更なる文化の発展や、未来の学問の礎になると思うからです。何より、こうした人類の文化の結晶に触れることは、人生を豊かにしてくれると思いませんか。

九大文学部での日々は、私に多くの気づきを与えてくれました。皆さんがこれから送る大学生活が、自分の世界を広げてくれる豊かな気づきに溢れたものであることを祈っています。

?が!に変わる瞬間

愛媛大学准教授（文学コース卒業生）

野村 優子 Yuko Nomura

独文学



研究の醍醐味は、疑問に思っていた事柄「?」が、明らかになる瞬間「!」にあると思います。ベルリン留学中、ずっと気になっていた場所がありました。ソニーセンター（現:ポツダム広場センター）という現代的な複合商業施設の一角に、王侯貴族を思わせる豪華な部屋が保存されており、その場違いな様子に不思議な感覚を抱いたまま時は過ぎていました。それが先日、研究の中で偶然、ここがどういう場所だったのか判明したのです。

この辺りは、20世紀初頭まで「ティーアガルテン地区」という瀟洒な邸宅が立ち並ぶ高級住宅地で、保存されていた部屋は、かつてここに建っていた高級ホテル「エスプラナーデ」の一部でした。この地区は、ナチス・ドイツの都市計画で多くの邸宅が撤去され、さらには第二次世界大戦の爆撃によって、その姿を完全に失いました。霧のように霞んでいた謎が解け、頭の中に新たな見取り図が立ち現れたとき、えも言われぬ満足感に満たされます。

この人は何を研究しているのだらうと思われたかもしれません。私は現在、世紀転換期のドイツで展開された装飾芸術運動について研究しています。美術史研究者だと自認していますが、学会発表は独文学系が多く、大学ではドイツ語も教えているので、ドイツ学研究者と言えなくもありません。こうした学際的な立ち位置にあることが、私の研究の特徴です。

美術史とドイツ学という分野横断的な研究基盤を築くことができたのは、九大文学部の柔軟な研究体制があったからです。ベルリン留学後、私は修士課程を芸術学研究室に在籍して美術史研究の基礎を固め、博士課程では専攻を独文学へと改めて、語学力とドイツに関する知識を深めました。専攻変更という大きな決断を、

快く引き継いでくださった二人の恩師には、感謝の念に堪えません。ここで培った二つの専門分野が、現在の研究職へと繋がっています。

大学や大学院生活に不安を感じる人も多いでしょう。私の場合は、社会人になってからの大学院進学だったため、不安はひとしおです。しかし、研究室で苦楽を共にした仲間の多くは研究者として活躍しています。自身の関心を深め、研鑽を続ければ、道は開けるとお伝えしたいです。

九大文学部で得られるのは知識だけではなく、研究生活を支え合える仲間との出会いも大きな財産です。私も何でも相談できる頼もしい仲間恵まれ、その中の一人とは「ドイツ語圏女性文化研究会」を結成し、フェミニズム関連本の翻訳など、楽しみながら活動を続けています。大学とは、自分なりの研究スタイルを探す場です。皆さんの大学生活も実り多いものとなりますように。

